

応援部生活を振り返って

私は現在、東京大学公共政策大学院に在籍している。学部時代は、応援部のチアリーダーとして活動していた。部活を引退して早くも半年が過ぎた。ひたすら夢中になっていた現役時代とは違って、応援部で過ごした意義を冷静に考えることができたようになったので、この場をお借りして、私なりの応援部で学んだことを書きたいと思います。

応援は成果が見えにくい。必死に応援し続けることは、想像以上に難しかった。猛暑日も、雷の日も、懸命に応援した。だが試合に負ける。応援は単なる飾りではないのか。私一人いなくなっても、応援は変わらないのではないか。自分の存在意義を見失いそうになった。そのような中、選手の方々はいつも「応援が力になる。」と言ってくれた。応援を重ねるうちに考えが変わった。勝敗に直接貢献できなくても良い。だが、戦う仲間がいる限り、一番の味方であろう。頑張っている選手のために、自分のできることを探そうと考えた。目の前のお客様が応援部と一緒に応援してくれたからといって、勝敗に影響を与えはしないかもしれない。だが、お客様を巻き込んでいく。その小さな積み重ねでより迫力のある応援席を作って、選手の心の拠り所になれるのであれば、自分は十分存在意義があるのではないかと考えるようになった。必死に自分のできることを探した。4年次には広報部門の責任者を務めた。もっと多くの東大生と一緒に応援がしたい。その一心で、学生を応援席に集めるべくPR企画に注力した。従来、東大生の来場者は少なかったが、PR企画を通じて多くの東大生が来場してくれた。自らの努力で応援席を盛り上げることができた。その達成感を噛み締めた。

人生において自分自身の存在意義を見失いそうになることがあるかもしれない。自分一人いなくなっても代わりの人間はいくらでもいるのではないか。だが、自分にできることは必ずある。このことを応援部での活動を通じて学んだ。どこかで自分を必要としている人々はいて、その人たちの力になれるように自分自身のできることを必死に探す。この姿勢をこれからも大切にしたい。そして、将来、多くの人の役に立てるよう、大学院で懸命に学び、精進したい。